

「震災に備えた医療体制を」

岩手・植田医師、岡山で講演

東日本大震災から2年半になるのを前に、岩手県大槌町で被災した開業医・植田俊郎さん(58)が7日、ふ

るさとの地域医療について、岡山市北区奉還町の岡山国際交流センターで講演した。植田さんは「震災前からあった地元医師たちの連携や各地からの医療チーム派遣に支えられた」と振り返り、災害に備えた医療体制をつくることの大切さを訴えた。

国際医療NGO「AMD A(アムダ)」の協力で、県立大大学院の公開講座として開かれ、医療系の学生や市民ら約70人が参加した。

植田さんは、海岸から約400坪の4階建ての自宅兼医院で被災。屋上に家族や看護師、近隣住民ら18人で避難した直後に津波が押し寄せ、翌日、自衛隊ヘリに救出された。

この日から仮設診療所が出来る2011年7月ま

で、身を寄せた避難所で患者の診察に当たり、現地入りしたAMD Aとも一緒に活動した。

講演では、「被災前から医療過疎地域で、開業医と県立病院が互いに助け合っていたことや、被災を免れた福祉施設の協力で、重度患者や高齢者の避難先を初期に確保できたことが大きかった。医療チームの受け入れもスムーズだった」と強調。

一方、「診察や投薬の履歴など患者個人の情報が津波で失われたのが、一番大変だった。医療情報を共有できる仕組みや災害に強い拠点づくりなどが、今後の課題だ」と訴えた。

看護師を目指す学生らの「震災当時、何が一番役だったか」という質問には「聴診器一つ。ここ(避難所)でやれることをやろうと考えた。何とかなるものです」と答えていた。